

ト一人ノ聖鸞親

改訂版



真宗宗歌

一、ふかきみ法に^{のり}

あいまつる

身^みの幸^{さち}なになに

たとうべき

ひたすら道^{みち}を

聞^ききひらき

まことのみむね

ただかん

真宗各派協和会 作詞
島崎赤太郎 作曲

$\text{♩} = 60$ *p*

ふ か き み の り に あ い ー ま つ る

mf *p*

み の さ ち な に ー に た と う ー ー べ き

mf

ひ た す ら み ち を き ー き ー ひ ら ー き

f *mf*

ま こ と の み む ー ね い た ー だ ー か ー ん

さん き え も ん
三 歸 依 文

人身にんじん受け難がたし、いますでに受く。仏法ぶつぽう聞き難がたし、いますでに聞く。
この身み今生こんじょうにおいて度せずんば、さらにいづれの生しょうにおいてかこの
身を度せん。大衆だいしゅうもろともに、至心に三宝さんぼうに歸依きえし奉たてまつるべし。

自ら仏に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大道だいどうを体解たいげして、無上意むじょういを發おこさん。

自ら法に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
深く經藏きやうぞうに入りて、智慧海ちえのごとくならん。

自ら僧そうに歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大衆だいしゅうを統理して、一切無碍ならん。

無上むじょう甚深微妙じんじんみみょうの法は、百千万劫ひゃくせんまんにゃくごうにも遭遇あいあうこと難かたし。我われいま見聞けんもんし
受持じゆじすることを得たり。願わくは如来の眞実義を解げしたてまつらん。

目 次

三帰依文	1 頁
はじめに - 不安に立つ -	3 頁
第 1 章 誕生・出家	4 頁
第 2 章 比叡山修学	8 頁
第 3 章 六角堂参籠	12 頁
第 4 章 吉水入室	16 頁
第 5 章 法難	20 頁
第 6 章 流罪・越後での生活	24 頁
第 7 章 移住・関東での生活	28 頁
第 8 章 帰洛・京都での生活	32 頁
第 9 章 善鸞義絶	36 頁
第 10 章 入滅	40 頁
真宗門徒として知っておきたいこと	44 頁
親鸞聖人足跡図	47 頁
親鸞聖人略年譜	48 頁
参考文献	50 頁
あとがき	51 頁

【例言】

親鸞聖人の伝記には不確定な部分が多く、事柄によっては諸説あるものもある。そこで本ノートでは、『宗祖親鸞聖人』（東本願寺出版部）の記述内容を基本として、「聖人伝」を執筆することとした。

[2008年11月、2014年6月改訂]

はじめに - 不安に立つ -

あなたは独りで生きていけますか？

私には無理です。

私はいろんな人に支えられて生きています。

それなのに私はそのつながりを忘れ自分だけの幸せを追い求めて止みません。

自分の居場所を失わないように必死です。

「不安」は、そんな私が感じる居心地の悪さです。

でも、人生に不安はつきものです。私がもしも「不安」ならば、それは、まだ私が人間らしさを失っていないことの証です。

「不安」を遠ざけることなく、あなたも人間を取り戻す歩みを始めてみませんか。

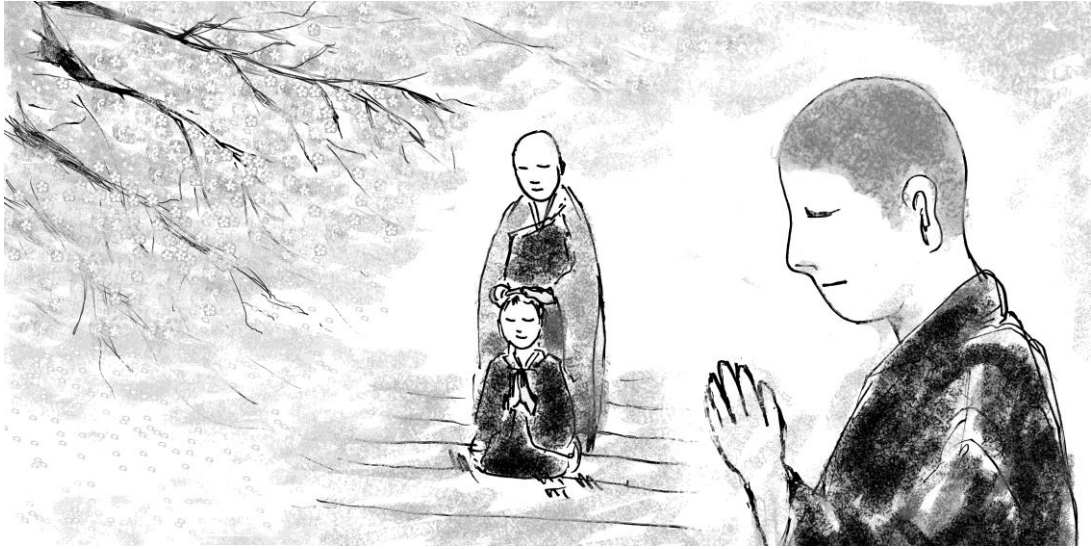
日本社会は今、それまで表面的には見えなかった、いや見ないようにしてきた「不安」があらゆる所であらわとなり、もはや隠し切れなくなっています。そのため、誰もが「不安」な気持ちを断ち切って、安心を得ようと必死にもがいているようです。

しかし、そもそも人が生きるということは、苦しみ、悲しみの連続ではないでしょうか？人生に「不安」はつきものであり、苦悩こそが人生であるといえましょう。いくら苦悩から逃れようとしても、逃れられない身の事実、さらに苦悩は増すばかりです。ならば、いっそ「不安を断とう」とするのではなく、「不安に立って」みてはどうでしょう。

実は、私たちに先立って「不安に立たれた」方がみえました。それが他ならぬ親鸞聖人です。このノートは、そんな聖人の生き様に学び、また聖人が歩まれた道とともに歩んでいくことを願って作られました。聖人は私たちのことを「御同朋・おんどうぼう御同行」と呼んでくださっています。私たちもその励ましの声を聞きながら、歩みを進めてまいりましょう。



第1章 誕生・出家



《法語》

ああ夢幻^{むげん}にして真にあらず、籌筭^{ちうさん}にして保ちがたし。呼吸の韻^{うた}に、すなわちこれ衆生^{しゆじやう}なり。一たび人身^{にんじん}を失いつれば、芳勳^{ほうくん}にも復せず。この時悟^{さと}らずは、仏もし衆生^{しゆじやう}をいかがしたまわん。願わくは深く無常を念じて、いたずらに後悔^{こうかい}を貽^{おこ}すことなかれ。

(『教行信証』^{ぎやうのまき}行 卷^{らくほうぶんるい}「楽邦文類」、『真宗聖典』183 頁)

【聖人伝】

平安時代も終わりに近い.....(承安3)年、親鸞聖人は藤原氏の流れをくむ日野氏のある一家の嫡男として、現在の京都市南部、宇治に近い日野の里に誕生されたといわれている。父は身分の低い公家、皇太后宮大進^{こうたいごうぐうのだいしん}.....、母は源氏にゆかりのある吉光女とも伝えられているが、確かなことは分かっていない。親鸞聖人が生まれたのは、保元・平治の乱を経て、平氏一門の権勢が絶頂に達していた頃であった。しかしその背後では、源氏を中心に反平氏の動きも見えはじめ、やがて源平の争乱がはじまり、乱世の相を呈していった。

そのような中で、聖人は.....歳の春の頃、天台宗青蓮院^{しょうれんいん}の.....のもとで出家得度し、僧名を範宴^{はんねん}と名のられたのである。この時、「明日ありと 思う心のあだざくら 夜半^{よわ}にあらしの ふかぬものかは」との道歌を示して、道心の深さを表わし剃髪^{ていはつ}を今すぐにと求められたという。

当時の社会状況は、源平の争いによる戦禍に加え、相次ぐ天災のために深刻な飢饉が起こり、多くの人々が飢え死にしていくなかで有様であった。また聖人自身の身の上にも、父親が争いに巻き込まれ、8歳の時に母親も亡くなるなど、将来を悲観するような出来事が続き、それがきっかけとなって出家されたといわれている。

視点 人と生まれた悲しみと喜び

どの時代に、どんな場所に生まれてくるのか誰にもわからない。皆、はからずして生まれてきた。『三帰依文』に「人身受け難し、いますでに受く」と説かれるように、私たちの誕生は不可解である。誕生が不可解であるとともに、歩んでいかねばならない人生も不可解である。それは生活がどんなに豊かで便利になろうと、変わることはない。仏法は「人生は苦なり」と教えるが、私たちはそうならぬ事を願いながらも、苦しみや悲しみを背負って生きていかねばならない存在なのである。それは、自らの努力によって得た、いかなる充足も安心も、ひとたび不測の事態が起きれば、すぐさま空しさや不安という感情に変質してしまうことによっても教えられよう。

しかし、ある先人が「人と生まれた悲しみを知らないものは、人と生まれた喜びを知らない」（金子大栄）と語ったように、苦しみや悲しみがあるからこそ、そこから救われていく喜びもある。幼き日の親鸞聖人は相次ぐ人の死を目の前にして、明日のことさえわからない我が身の救われる道、つまり仏道を求めて出家された。今、その一人の行者の歩みに出あった私たちは、一人ひとりが抱える苦しみや悲しみを場として、仏法に我が身をたずねていく歩みを賜ったのである。

★ノート★

S 資料1 養和の飢饉（鴨長明『方丈記』）

前の年、かくの如く辛うじて暮れぬ。明くる年は立ち置くべきかと思ふほどに、あまりさへ疫癘うちそひて、まさ、まに、あとかたなし。世人みなけいしぬれば、日を経つゝきはまりゆくさま、少氷の魚のたとへにかなへり。はてには、笠打ち着、足引き包み、よろしき姿したるもの、ひたすらに家ごとに乞ひ歩く。かくわびしれたるものどもの、歩くかと思へば、すなはち倒れ伏しぬ。築地のつら、道のほとりに、飢ゑ死ぬるもののたぐひ、数も不知。取り捨つるわざも知らねば、くさき香世界にみち満ちて、変りゆくかたちありさま、目も当てられぬこと多かり。（中略）

また、いとあはれなる事も侍りき。さがたき妻・をどこ持ちたるものは、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。その故は、わが身は次にして、人をいたはしく思ふあひだに、稀々得たる食ひ物をも、かれに譲るによりてなり。されば、親子あるものは、定まれる事にて、親ぞ先立ちける。また、母の命尽きたるを不知して、いとけなき子の、なほ乳を吸ひつゝ、臥せるなどもありけり。

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

①法界寺



別名「日野薬師」と呼ばれる真言宗醍醐派の寺院。1051（永承 6）年日野資業によって創立された。親鸞聖人は、この日野資業から 5 代後の日野有範を父とし、吉光女を母として誕生されたと伝えられる。境内東側には日野家一族の廟所があり、大きい五輪塔が父・有範の墓と伝えられている。

所在地/京都市伏見区日野西大道町

交通案内/JR「六地蔵」駅から徒歩 25 分
/京阪「六地蔵」駅から京阪バス「日野誕生院」下車、徒歩すぐ

②日野誕生院



西本願寺第 19 代本如上人が親鸞聖人の誕生を顕彰し、その後第 20 代広如上人の時に誕生講がもうけられ、1931（昭和 6）年に新しく本堂が建てられた。中央の厨子に本尊阿弥陀如来を安置し、かつては両脇に親鸞聖人幼童の御影と父有範の木像を安置していた。境内には産湯井戸がある。

所在地/京都市伏見区日野西大道町

交通案内/JR「六地蔵」駅から徒歩 25 分
/京阪「六地蔵」駅から京阪バス「日野誕生院」下車、徒歩すぐ

③青蓮院



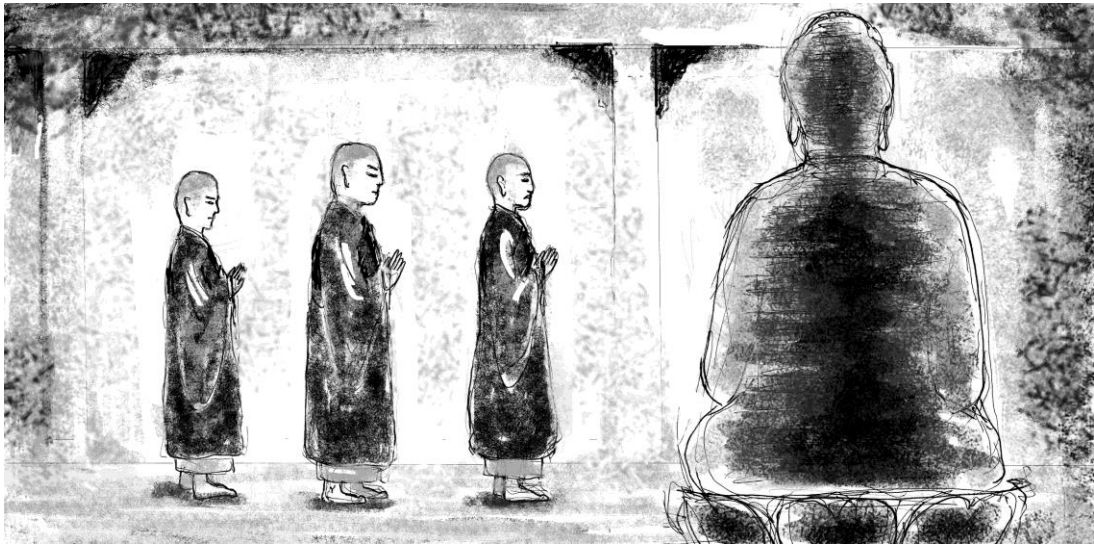
比叡山延暦寺に所属し、妙法院（三十三間堂）、大原の三千院とともに天台宗の三門跡の一つである。境内には親鸞聖人が得度された「御得度の間」（右写真）や、聖人が得度の時に剃り落とされた髪の毛を植えたという像が安置されている「植髪堂」、また像に使われた残りの髪を納めたという遺髪塔などがある。

所在地/京都市東山区栗田口三条坊町

交通案内/市バス「知恩院前」下車、徒歩 5 分

【聖人伝の空欄】 1 1 7 3、日野有範、9、慈門じえん

第2章 比叡山^{しゅがく}修学



《法語》

かなしきかなや道俗の
天^{てん}神^{しん}地^ち祇^ぎをあがめつつ

良時^{きよとき}苦^{くる}日^{にち}えらばしめ
卜^う占^{せん}祭^{さい}祀^いつとめとす

しょうぞうまつわさん
(『正像末和讃』、『真宗聖典』509頁)

【聖人伝】

9歳から29歳までの少・青年時代の20年間、親鸞聖人は比叡の山に生きられた。

最澄によって開かれた比叡山.....寺は、釈尊のように修行し目覚めた人となって、迷いの人々をたすけようという.....道の根本道場として、その使命を自負し権威を誇っていた。しかし聖人が学ばれた頃には、世俗の生活そのままに権力に結びつき、地位や財を得ようとする貴族出身のものや、現世利益^{げんぜりやく}のための加持祈祷^{かじきとう}の類にあけくれるものなどが目につくようになっていた。もちろん、ひたすらに修学に励む僧たちもいなかったわけではない。だがその多くは、ただみずからの学問の世界にのみ閉じこもる人たちであった。

この比叡山で常行三昧堂の.....僧をつとめられていた聖人は、仏の示されるようなさとりを開くことは、もはやこの世ではかなわないのではないかと、修学者としての問いをますます深めながら、もがき、悩み、苦しむ日々を過ごされたのである。

視点 自己とは何ぞや

「世間虚仮、唯仏是真」（聖徳太子）の言葉の通り、自分が探している出世間の真実は、必ずここ比叡山になればあるはずだ。それを信じ、それを手に入れるために、必死に頑張って修行に励む。誘惑に打ち勝とうと自身の最善の努力で修学に励む。しかしながら手に入らない。心の中の曇りが晴れない。このモヤモヤの正体はいったい何なのか。今一度、自身の求める根本的な問いと答えが何であったのかを問い直す。見失いと問い直しを繰り返す。それが若き日の親鸞聖人の姿であったのではないだろうか。

学問とは問いを学ぶと書く。修学とはその学問を身に修めると書く。現代に生きるわれわれは問いよりも答えを大切にする。攻略本、マニュアル本、インターネット検索による答え探しなどなど。答えを求めることには熱心だが、人生における根本的な問いそのものは見つけようとしていない。学問よりも“学答”と、遠まわりを避けて一直線に処世術やら金儲け、知識自慢のための答えを見つけ出そうと必死である。今一度じっくりと立ち止まって、親鸞聖人をはじめとする先人達のように、「自己とは何ぞや、これ人世の根本的問題なり」（清沢満之）と、われわれの真に学び求めるべきものは何かを問い直してみたいものである。

★ノート★

S 資料1 ^{しなが むこく}磯長の夢告

我三尊化塵沙界
諦聴諦聴我教令
命終速入清浄土

日域大乘相応地
汝命根応十余歳
善信善信真菩薩

(書き下し文)

我が^{さんぞん}三尊は^{じんじゃ}塵沙の^け界を化す

^{あきらか}諦に^き聴け諦に^{きようれい}聴け我が教令を

命終わりて速やかに^{しょうじょうど}清浄土に入らん

^{じちいき}日域は^{だいじょうそうおう}大乘相応の地なり

^{なんじ}汝の^{みょうこん}命根まさに十余歳なるべし

善く信ぜよ善く信ぜよ真の菩薩を

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

④比叡山延暦寺



天台宗の総本山。788（延暦 7）年最澄が一乗止観院を開いたのがはじまり。最澄の没後、822（弘仁 13）年大乘戒壇が許され、翌年「延暦寺」の寺号が下賜された。以来、平安京の鎮護の寺として勢力を増し、平安末期には東塔・西塔・横川の三塔十六谷に、三千坊を数えるほどに栄えた。1571（元亀 2）年、織田信長の焼討にあい徹底的に破壊されたが、豊臣・徳川氏らにより復興され寛永年間（1624～44）には、ほぼ現在の姿になった。世界文化遺産に登録されている。

所在地/滋賀県大津市坂本本町

交通案内/京阪電鉄京津線「坂本」駅から徒歩 10 分、坂本ケーブル乗り換え終点下車
/JR 湖西線「比叡山坂本」駅から徒歩 20 分、坂本ケーブル乗り換え終点下車

⑤磯長・聖徳太子廟（叡福寺）



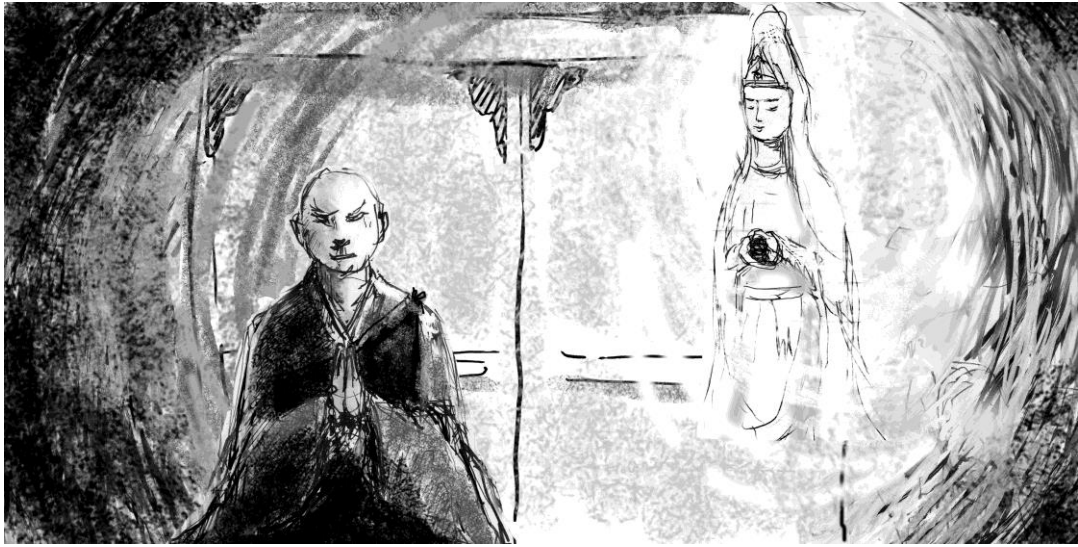
単立寺院で「太子宗」を名のる。山号は磯長山、本尊は如意輪観音である。開基は聖武天皇ともいい、聖徳太子または推古天皇ともいう。聖徳太子らの墓所とされる叡福寺北古墳があることで知られている。寺伝によれば、太子は生前の 620（推古 28）年にこの地を自らの墓所と定め、廟を造営したという。太子の棺とともに、母の穴穂部間人太后、妃の膳大郎女の棺も納められていることから、「三骨一廟」と呼ばれている。

所在地/大阪府南河内郡太子町

交通案内/近鉄南大阪線「上之太子」駅から金剛バスで 15 分「太子前」下車、徒歩 3 分
/近鉄長野線「喜志」駅から金剛バスで 15 分「太子前」下車、徒歩 3 分

【聖人伝の空欄】延暦、大乗菩薩、不断念仏

第3章 六角堂参籠



《法語》

自力^{じりき}聖道^{しょうどう}の菩提^{ぼだい}心^{しん}
常没^{じょうもつ}流転^{りゅうてん}の凡愚^{ぼんぐ}は

こころもことばもおよばれず
いかでか発越^{はつこき}せしむべき

(『正像末和讃』、『真宗聖典』501頁)

【聖人伝】

比叡山に上がって20年がたった1201(建仁元)年、29歳になった親鸞聖人は、聖徳太子の建立と伝えられ、観音信仰の霊場として盛んであった

.....に、100日を期して参籠し祈りをつづけられた。

それは後に、「定水^{じょうすい}を凝らすといえども識浪^{しきろう}頻りに動き、心月^{しんげつ}を観^{かん}ずといえども妄雲^{もううん}猶覆^{なおお}う」と伝えられるように、延暦寺の僧として懸命に修行しようとしても、煩惱によってそれがはばまれてしまう自らのあり方に苦悩し、真実の救いを願ってのことであつた。そして、参籠を始めて95日目の明け方、

行者宿報^{ぎょうじゃしゅくほう}設女犯^{せつにょはん}

我成玉女^{がじょうぎょくによしん}身被犯^{みびはん}

一生之間^{いっしょうけん}能莊嚴^{のうしょうごん}

臨終^{りんじゅう}引導^{いんどう}生極樂^{しょうごくらく}

行者宿報^{ぎょうじゃしゅくほう}にてたとい女犯^{にょはん}すとも

我玉女^{がじょうぎょく}の身となりて犯^{はん}せられん

一生の間^{いっしょう}能く莊嚴^{しょうごん}して

臨終^{りんじゅう}に引導^{いんどう}して極樂^{ごくらく}に生^{しょう}ぜしむ

という、救世^{くせ}観音の夢告を受けられたのである。

その夢告は、長きにわたり比叡山で積んできた、.....の修行によって悟りをひらく道(聖道門^{しょうどうもん})をすて、在家・出家の別なく、ただ念仏によって救われていく道(浄土門)を説いておられた、.....のもとを訪れる決断を聖人に促したのであった。

視点 日常生活そのものに仏道がある

自力の行を修めてさとりをひらかんとする道を歩んできた聖人にとって、比叡山を離れることは苦渋の決断であったに違いない。百日にもわたり参籠を志し、夢にまで思案し苦悩し続けた聖人の姿を、私たちは深く受け止めるべきであろう。自らの煩悩の問題に悩んでいた聖人にとって、六角堂での夢告は、戒律を重んじた出家仏教にこだわらない新たな仏教の可能性を示唆したといえる。

私たちは懸命に何かを達成しようとしても、その意志とは裏腹に、自らの煩悩によって阻害されてしまうことがある。煩悩という問題は、つねに私たちの意志を超えた身の事実（宿報）として迫ってくるのである。

真実の道とは、煩悩を消し去ることで開かれるような特別な道でもなければ、煩悩をうまくかわして得る道でもない。煩悩にまみれた私たちの現実生活の中にこそ開かれている道である。すなわち日常生活そのものに仏道があるのではないか。「行者宿報」で始まる夢告の言葉は、このようなことを私たちに教えてくれているのではなかろうか。

★ノート★

S 資料1 『恵信尼消息』第3通

荷^なよりも、殿の御往生^{おうじょう}、中々、はじめて申すにおよばず候^う。山^{やま}を出^いでて、六角堂^{かくかくどう}に百日こもらせ給いて、後世^{ごせい}を祈^{いの}らせ給いけるに、九十五日のあか月、聖徳太子^{しょうとくたいし}の文^{もん}をおすびて、示現^{しげん}にあずからせ給いて候いければ、やがてそのあか月、出^いでさせ給いて、後世^{ごせい}の助^{たす}からんずる縁^{えん}にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人^{ほうねんじょうにん}にあいまいらせて、

(『真宗聖典』616頁)

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

⑥六角堂

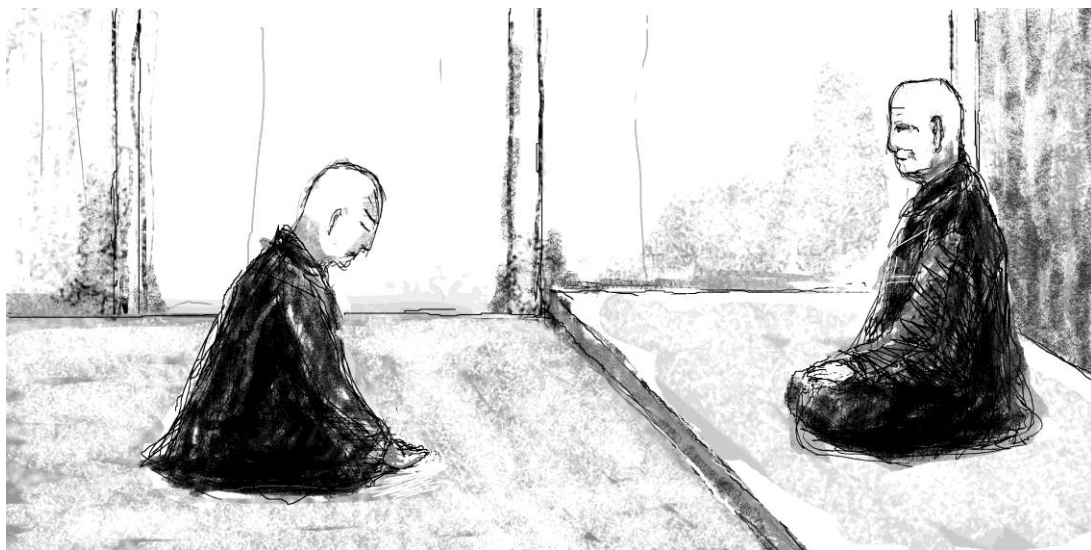


天台宗の寺院で、正式名称は紫雲山頂^{ちようぼう}法寺^{ほんじ}というが、本堂が六角形であることから「六角堂」と通称される。聖徳太子の本地とされる如意輪観音を本尊とする。寺伝によれば、587（用明2）年、聖徳太子が四天王寺を建立するための用材を求めてこの地を訪れ、旅の疲れを癒そうと池で沐浴した際、靈験を得て観音をまつる御堂を建立したのを起源とするという。その池のほとりに建てられた坊舎を「池坊」といい、のちに華道の拠点となった。また近年、境内東奥に「親鸞堂」（右写真）が建立され、親鸞聖人が夢告を授かる姿の「夢想之像」などが安置されている。

所在地/京都市中京区六角通東洞院西入ル堂之前町
交通案内/地下鉄烏丸線「烏丸御池」駅から徒歩5分

【聖人伝の空欄】六角堂、自力^{じりき}、法然上人

第4章 よしみずにゆうしつ 吉水入室



《法語》

しかるに愚と禿^{しか}の鷲、達仁^{たにん}の酉^ひの曆、雜行^{ぞうぎょう}を棄てて本願に歸す。
(『教行信証』後序、『真宗聖典』399頁)

【聖人伝】

救世^{くせ}観音の夢告にうながされ、親鷲聖人は京都東山.....の法然上人を尋ねられた。その時の出あいがどのようなものであったか。それ以後少なくとも100日の間、「降るにも照るにも、いかなる大事^{だいじ}にも、参^{まい}りて」との言葉が示すとおり、法然上人の教えを聞かずにおれないものを、親鷲聖人は感じておられたのであろう。

そして、念仏者法然上人より、「ただ.....して、弥陀にたすけられまいらすべし」の一言を聞きとった親鷲聖人は、その吉水教団ではじめて念仏者として歩み出されていくことになるのである。時に29歳のことであった。

長きにわたり求め続けて、見出すことのできなかった道がここにある。仏法に生きている人々がいる。聖人にとって、その場に身をおくことはこの上のないよろこびであった。とくに元久2(1205)年、33歳の時に、法然上人がその教えを高らかに宣言した主著、『.....』の書写と、上人の肖像画を描くことを許されたことは、親鷲聖人に終生消えることのない深い感動を与え、強い使命感をよび起こしていったのである。

視点 よき師との出あい

私たちは困難に直面したとき、その状況を変えることで困難を乗り越えようとしているのではないだろうか。比叡山における親鸞聖人もまたそうであった。どうにもならない身がどうにかなる身となって救われていく道を、求められていたのである。それに対して法然上人は、そのどうにもならない身のまま救われていく道を示されたのであった。

ここに親鸞聖人の驚きがあった。いくら状況を変えたところで、「この身」という主体が問われない限り、何も解決しないことを言い当てられたのである。「ただ念仏して」という呼び声の中に、本来帰すべき自己を発見し、自分の理解力、行動力がいかにあてにならないものであるかを知らしめ、それを棄てさせたのが、法然上人との出あいであったと言える。それはまた、本願念仏の教えに出あうと同時に、思いもよらない自分と出あうことでもあったのである。

思いもよらない自分に出あうこと、それこそが仏法ではないか。自分の思い通りのものに出あいたい私が、人との交わりを通して、どうしようもできない私の人生に出あうのである。よき師、よき友との交わりが私の人生に呼びかけてくるのである。

★ノート★

§ 資料1 『高僧和讃』

曠劫多生のあいだにも
本師源空いまさずは

出離の強縁しらざりき
このたびおなしくすぎなまし

真の知識にあうことは
流転輪廻のきわなきは

かたきがなかになおかたし
疑情のさわりにしくぞなき
(『真宗聖典』498、499頁)

§ 資料2 法然上人御影



(愛知県岡崎市・妙源寺蔵)

*本御影はまさに元久2(1205)年に親鸞聖人が、法然上人から描くことを許されたものと伝えられる。

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

⑦吉水草庵跡（安養寺）



そもそもは最澄の創建とされる。法然上人は 30 数年間ここを本拠地として専修念仏の教えを説き、親鸞聖人もここに通われた。その後、専修念仏弾圧で荒廃したが、1385（至徳 2）年国阿が入寺、時宗に改めて興隆した。現在は時宗の寺院。同寺の山号慈円山が円山公園の名称のもとになった。近くの弁天堂の境内にある水ためは、かつて青蓮院で用いるあか關伽の水（仏前に供える水）として大切にされた浄水であり、その水の涌くところ一帯を、いつしか吉水と呼ぶようになったという。

所在地/京都市東山区八坂鳥居前東入ル
円山町

交通案内/市バス「祇園石段下」下車、
徒歩 10 分

⑧大谷派岡崎別院



吉水時代、親鸞聖人はこの地に庵を結び、ここから吉水の法然上人のもとへ通われたという。1801（享和元）年、東本願寺第 20 代達如上人の時、堂宇を建立して御坊としたのがはじまりとされる。本堂左方の八角の石柵で囲まれた地は（下写真）、親鸞聖人が越後へ流罪の時、自身の姿を映して名残を惜しんだと伝えられ、鏡池とも姿見の池ともいわれる。



所在地/京都市左京区岡崎東天王町
交通案内/市バス「岡崎神社前」下車、
徒歩 1 分

【聖人伝の空欄】 よしみず吉水、せんじやく念仏、選 択 本願念仏集

第5章 法難



《法語》

竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、淨土の真宗は証道いま盛なり。しかるに諸寺の釈門、教に昏くして眞伎の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁うることなし。

(『教行信証』後序、『真宗聖典』398頁)

【聖人伝】

親鸞聖人は吉水教団に、どのような階層の人々であれ同じ人間として生きているよろこびと、人の世にぬくもりを感じていくことのできる念仏者の僧伽を見いだしておられた。それは、どのような世間的権威をも必要としない仏法の僧伽であった。

しかしその一方で、そのような教団に対し、非難や圧迫が起こりはじめていた。1204(元久元)年冬、延暦寺の僧たちが念仏の禁止を訴えたのである。そのため同年11月、法然上人は七箇条制誡をつくり、門弟子にきびしい戒めへの誓いの署名を求めた。このとき親鸞聖人は、「僧綽空」の名をもって署名に加わっている。

さらに、1205(元久2)年10月、奈良の.....が法然上人ならびにその弟子たちの罪をかぞえあげ、処罰するよう朝廷につよく迫った。そして翌年12月、院の御所の女房たちが法然上人門下の住蓮・安楽らの念仏会に加わったことが、後鳥羽上皇の怒りをよび、興福寺の奏状がにわかにとりあげられ、1207(承元元)年2月、住蓮ら4人が死罪に、また法然上人はじめ8人が流罪に処せられるにいたったのである。このとき、法然上人は「藤井元彦」の罪名のもとに.....の国へ、親鸞聖人は「藤井善信」の罪名で.....の国へ流罪となった。その後師弟はついに、ふたたび相会う時をもつことなく終わったのである。

視点 仲間はずれを生み出さない僧伽^{さんか}

「仲の良い者を仲間と呼ぶが、仲間作りは、同時に仲間はずれをつくる」（祖父江文宏）という言葉がある。真実を求め真実を生きたいという堅固な気持ちを持って、仏法の仲間作りをすることが、仏法の仲間はずれをつくることに繋がったとしたら、それは慙愧^{ざんき}にたえないことである。

親鸞聖人にとっての「僧伽」とは、仲間入り・仲間作りをすることではない。「独立者一人^{いちにん}」になることをめざした僧伽。一人^{いちにん}になるとは、「孤立（ひとりぼっち）」になることではない。国が違おうとも、民族が異なろうとも、性別・年齢・宗教などの条件は違っていても、眼前の人、現前の事実^{じじつ}に等しく出あう「独立者一人^{いちにん}」となることである。仲間はずれを生み出さない僧伽を浄土真宗というのである。

★ノート★

§ 資料1 『興福寺奏状』

奈良興福寺（南都）より朝廷に提出された念仏停止を求める奏状。貞慶^{じょうけい}（1155－1212年）の起草とされる。吉水教団に対して以下の九ヶ条の過失をあげ、その処罰をつよく迫る。

- | | |
|-----|---|
| 第1条 | 新宗を立つる失（朝廷の許可なく新宗を立てる） |
| 第2条 | 新像を図する失（念仏行者のみに光明がさす攝取不捨曼荼羅 ^{せつしゆふしやまんだら} を描く） |
| 第3条 | 釈尊を軽んずる失（阿弥陀仏のみを重んじて釈尊を軽んじる） |
| 第4条 | 万善を妨ぐる失（念仏以外の行を妨げる） |
| 第5条 | 霊神に背く失（神祇を拝さない） |
| 第6条 | 浄土に暗き失（念仏のみを往生浄土の道と説いている） |
| 第7条 | 念仏を誤る失（観想念仏を軽んじ称名 ^{しょうみょう} 念仏のみを重んじる） |
| 第8条 | 釈衆を損ずる失（戒律を守る人々を否定する） |
| 第9条 | 国土を乱る失（既成仏教に背き世の中を混乱させる） |

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

⑨住蓮・安樂の墓（安樂寺）



山号は住蓮山。浄土宗の寺で、本尊は阿弥陀如来。鎌倉時代の初め、法然上人の弟子、住蓮と安樂が専修念仏の道場として開いた鹿ヶ谷草庵がはじまりという。この草庵は、1207（承元元）年の「承元の法難」によって、専修念仏の停止と法然上人の流罪、その弟子への処刑がなされたことで、一時期荒廃した。流罪の解けた法然上人は、住蓮と安樂を弔うために、荒廃していた仏堂跡にこの安樂寺を再建したという。二人の弟子たちの名を寺の名前としたほど、上人が二人の死を悔やんでいたことが偲ばれる。境内南には、住蓮と安樂の墓と石塔（右写真）が建てられている。

所在地/京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町

交通案内/市バス「錦林車庫前」下車、徒歩5分

【聖人伝の空欄】興福寺、土佐、越後

第6章 流罪・越後の生活



《法語》

善^{にん}人^なおもて往生をとぐ、いわんや悪^{にん}人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人^なお往生す、いかにいわんや善人^ををや。この^じ榮^う、^い一^い旦^{たん}そのいわれあるににたれども、本願他力の^し意^い趣^そにそむけり。

(『歎異抄』第3章、『真宗聖典』627頁)

【聖人伝】

1207（承元元）年、35歳の親鸞聖人は流罪の地・越後の国府におもむかれた。越後の風景は、京都になれた目にはまったくの別世界であった。そこで聖人が出あわれたものは、辺地の荒涼とした自然であり、富や権力などとはまったく無縁な「いなかのひとびと」の姿であったのである。そしてその地で聖人は、妻
.....と幾人かの子どもをかかえながら、新たな生活を送っていったのである。

さて、法然上人のもとで学びえた念仏の教えに、確かなものを感じておられた聖人であったが、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という言葉が、その生活の中でいよいよ確かなものとなってくることを感じていかれたのではないか。今日一日を生きることには精一杯なこの人々こそ、本願を信じ念仏申すほかない人々であるという、切実な思いが深まるとともに、その念仏をどのようにしてこの人々の生活の上にひらいていけばよいのかという問いが、重く聖人の心に担われていったのである。まさに聖人は人を化^けする前に、まず自ら教えられたと言えるのである。

その歩みの中から、聖人は.....の自覚とともに、.....釋親鸞という名のりをあげられたのである。

視点 罪はつくるなり

法然上人とともに生きる吉水の時代を、わずか六年で断ち切れ、越後の地に投げ出された親鸞聖人。比叡山のきびしい修行に耐えた身であれば、風土のきびしさ、食料の不足などはさほどの苦痛ではなかったかもしれない。しかし、法然上人との別離は、はかり知れない怒りや悲しみを、聖人にもたらしたのではないだろうか。

越後の生活で親鸞聖人が出あわれた人々は、「いなかのひとびと」であった。いなかの人々とは、善根^{ぜんこん}を積むこともできず、その日を生きのびるためには、悪事とされていることでも、あえて行わなければならない人々である。人間としてこの世で生きている限り、人は決して「悪事」と無縁に生きることはできない。例えば、食べなければ死ぬという身の事実において、自分が生きているということは、他のいのちを殺し続けているのである。親鸞聖人は、自分もまた罪の自覚と無縁に生きていた身の事実を、いなかの人々から教えられたのである。そして、恵信尼とともに肉食妻帯^{にくじきさいたい}の一生活者となって、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」にかえっていかれたのである。

私たち現代人は、科学の発達と共にこの身の事実を忘れて、その日暮らしを送っているのではないだろうか。この身の事実に気づいたとき、「いのちの、娑婆にあらんかぎり、つみはつくるなり」という言葉の重さを、あらためて感じずにはいられないのである。

★ノート★

§ 資料1 『教行信証』後序

これに因って、真宗興隆の矢祖源空法師、ならびに門徒数輩、罪科を考えず、猥りがわしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改めて姓名を賜うて、遠流に処す。予はその一なり。しかればすでに僧にあらず俗にあらず。このゆえに「弐」の字をもって姓とす。（『真宗聖典』398頁）

§ 資料2 恵信尼公御影



（龍谷大学図書館蔵）

* 室町時代末期の制作とされてきたが、近年江戸時代初期と考えられるようになった。老年の姿を写したものと推察される。

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

⑩竹之内草庵跡（五智国分寺） たけのうち ぐちこくぶん



居多ヶ浜のすぐ近くに天台宗の五智国分寺がある。かつての越後国分寺で、聖武天皇の発願にもとづいて創建された。現在の本堂は1821（文政4）年の再建。ここは親鸞聖人が流罪後最初に住まわれた、「竹之内草庵」があった場所といわれ、草庵の跡を示す石碑が建てられている。また、本堂に向かって右手後方に、聖人が「鏡ヶ池」に写った姿を自ら刻まれたと伝える、「親鸞聖人座像」の安置された「親鸞堂」（上写真）がある。

所在地/新潟県上越市五智3丁目
交通案内/JR「直江津」駅から頸城自動車バス「五智国分寺裏門」下車、徒歩すぐ

【聖人伝の空欄】恵信尼、非僧非俗、愚禿ぐとく

⑪浄土真宗本願寺派国府別院 こくふ



国府別院は親鸞聖人が国府に流された後、「竹之内草庵」から移り住んだ、「竹ヶ前草庵」があった場所といわれている。聖人が東国へ旅立った後、草庵は荒廃し、近くの天台宗宝持院の土地となったが、1805（文化2）年門信徒の懇念により本堂が建立され、1871（明治4）年宝持院から西本願寺が土地を買い求め、1876（明治9）年「小丸山別院」と公称し、さらに1930（昭和5）年「本願寺国府別院」と改称された。

所在地/新潟県上越市国府1丁目
交通案内/JR「直江津」駅から頸城自動車バス「国府別院前」下車、徒歩すぐ

第7章 移住・関東での生活



《法語》

他^り方^{かた}の信心うるひとを うやまいおおきによろこべば
すなわちわが親^{おや}友^{とも}ぞと 教主^{しゅ}世^よ尊^{そん}はほめたまう
(『正像末和讃』、『真宗聖典』505頁)

【聖人伝】

越後に流されて5年、1211（建暦元）年11月、39歳の時、親鸞聖人は法然上人とともに罪を許された。しかし、それもつかの間、翌年1月25日に法然上人が世を去ったという悲報がもたらされた。そのためもあってか、聖人は京都には戻らず、1214（建保2）年42歳の時に、妻子とともに.....の地へと旅立つ。途中、上野国^{こうずけ}佐貫^{きぬき}で土地の人々のために.....を千部読誦することを始めたが、4、5日の後に思いかえしてそれをやめたと伝えられている。

上野国から武蔵国^{むさし}を経て常陸国^{ひたち}に入り、.....の地に草庵を設けた。以後約20年の間、常陸国を中心に下総国^{しもうさ}・下野国^{しもつけ}まで歩みを進め、多くの人々と出あい、交わりをもっていった。教えを受けた人々は、『親鸞聖人門侶交名帳^{もんりよきやうみようちやう}』などに伝えられる70数名を中心に、数千人にも達したであろうと考えられている。こうして、関東においての歩みの中から念佛者の僧伽が形成されていったのである。

私たちは他人と出あうとき、自分の“ものさし”で他人をはかる。自分と趣味が合うかどうか、自分より知識があるかどうか、自分と利害が共通するかどうか。私にとっての都合の良し悪しで他人を判断している。そこには、基準である私自身が問い返されてくることはない。「気に入らないと思っていたが、よくよく話してみるといい人だった」などという場合、変わったのは相手ではなく、自分の“ものさし”が変わったに過ぎないのではなかろうか。

“ものさし”で他人を問うのではない、“ものさし”そのものが問われるのである。

親鸞聖人が関東で出あわれた「いなかのひとびと」の中には、文字も知らない人が多数いた。教えを受けとる側としか成り得ないこの人々に対し、聖人は「御同朋・御同行」と大切に処遇をあたえていかれた。その人々と共に和する中に、“ものさし”を問われ、「念仏もうす」しかない自分の有り様を深くいただかれながら、“親友”との出あいはたされたのである。

友・共・朋。あなたの周りに、本当に“とも”と呼べる人はいるだろうか。

★ノート★

S 資料1 『唯信鈔文意』

ひとすじに、具縛の凡愚、屠活の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信染すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。愚縛は、よろずの煩惱にしばられたるわれらなり。煩は、みをわずらわす。悩は、こころをなやますという。屠は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふるものなり。これは、りょうしというものなり。活は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。「能令瓦礫變成金」というは、「能」は、よくという。「令」は、せしむという。「瓦」は、かわらという。「礫」は、つぶてという。「變成金」は、「變成」は、かえなすという。「金」は、こがねという。かわら・つぶてをこがねにかえなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。りょうし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。

(『真宗聖典』552頁)

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

⑫稲田草庵跡（西念寺）^{さいねん}



常陸に入られた親鸞聖人は、しばらくして笠間の稲田に草庵を構え、教えを広めるとともに、『教行信証』の執筆に取りかかれた。草庵跡と伝わる稲田禅房西念寺（稲田御坊）は、「浄土真宗別格本山」と号する単立の寺院で、境内右手を上ったところに、聖人の頂骨（頭部の遺骨）を納めたとされる「聖人ご頂骨堂」がある。また付近には、聖人がこの地を離れられる際に、草庵を振り返られたという「見返り橋」のモニュメントがある。

所在地/茨城県笠間市稲田

交通案内/JR 水戸線「稲田」駅から徒歩
15分

⑬鹿島神宮



有史以前からの伝承を持ち、古くから常陸国一の宮として尊崇を受けてきた。親鸞聖人在世の頃には、他の神社と同様、神仏混淆で境内にはいわゆる「神宮寺」があり、仏教の聖典も豊富に納められていたと考えられる。聖人は稲田の地から、聖教類を求めてしばしば通われたと伝えられ、その道すがら念仏の教えを説き、多くの人々が帰依したという。無量寿寺を開いた順信などはその代表格である。

所在地/茨城県鹿嶋市宮中

交通案内/JR 鹿島線「鹿島神宮」駅から
徒歩 10分

【聖人伝の空欄】 関東、浄土三部経、稲田^{いなだ}

第8章 帰洛・京都での生活



《法語》

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の袿袈を知りて、良に師教の慈厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これに因って、真宗の誡を鈔し、淨土の要を撫う。ただ仏恩の深きことを念じて、久倫の嘲を恥じず。

(『教行信証』後序、『真宗聖典』400頁)

【聖人伝】

親鸞聖人は.....歳を過ぎた頃、約20年過ごした関東の地を後にし、京都へと向われた。その途中、三河や尾張にも立ち寄られ、多くの人々に教えを説いたと伝えられている。

しばらくぶりに戻った京都。しかし、そこでの生活は決して平穏なものではなかったようである。聖人は住居をあちらこちらと変えながら、すでに関東で執筆をはじめられていた主著『.....』を完成させるとともに、たくさんの『.....』(仮名交じり文の讃歌)を著わされた。さらに、『唯信鈔文意』、『尊号真像銘文』、『一念多念文意』などの書物を著わし、本願念仏の教えをわかりやすくのこされたのである。

聖人が京都に戻られた後も、関東の門弟の中には、じかに聖人の言葉をいただこうと、はるばる上洛するものもあった。また、しばしば手紙も交わされており、その中には、いただいた「御ころざしのもの」に対して、感謝の気持ちを伝えるものもある。聖人の生活が、関東の門弟によって支えられていたことがうかがわれよう。聖人と関東の人々との密接な関係は、最晩年まで続くのである。

視点 真の拠り所を明かす

私たちは、洪水の如く押し寄せてくる情報にのみ込まれつつ、生活の拠り所をどこに求めているのか思案にいとまがない。そのような中で私たちが普段、心底から求めている拠り所は、“健康・家族・お金”の三つに集約されると言ってよいであろう。そして、これらを信じる自分自身を問うこともなく、「これさえあれば、大丈夫」と固執し続けているのである。しかし、よくよく考えてみれば、これらのものは縁が尽きれば無くなるものである。とすれば、そのようなものに安心の拠り所を求めたとしても、結局は不安を募らせるばかりで、真の拠り所とはならないのではないだろうか。

親鸞聖人の帰洛の理由ははっきりしないが、帰洛後の聖人は息をつぐまもなく、『教行信証』を機軸に、多数の『和讃』、『唯信鈔文意』、『尊号真像銘文』、『愚禿鈔』、『入出二門偈』など活発に著作活動をされる。それは、承元の法難後も次から次へと沸き起こる念仏への無理解を縁に、「よきひとのおおせ」に立ち返り、自らの賜った信心を問い正していかれた表明であった。まさに、一念仏者としての新たな出発であったのである。

私たちは当てにもならぬものを拠り所にして、真の拠り所を明かそうと身を粉にし骨を砕いて生きた聖人を、敬いながらも、実は遠ざけてきたのではないだろうか。

★ノート★

S 資料1 関東の門弟の上洛

おのおの十^{じゅう}余^よか^こ国のさかいをこえて、身^{しん}命^{めい}をかえりみずして、た
ずねきたらしめたまう御^{おん}ころざし、ひとえに往生極樂のみちをと
いきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存^{ぞん}知^じ
し、また法^{ほう}文^{もん}等^{とう}をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしてお
わしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。もししからば、
南^{なん}都^と北^{ほく}嶺^{れい}にも、ゆゆしき学^{がく}生^{しょう}たちおおく座せられてそうろうなれば、
かのひとにもあいたてまつりて、往生の要^{よう}よくよくきかるべきなり。
親^{しん}鸞^{らん}におきては、ただ念仏して、弥^み陀^だにたすけられまいらすべしと、
よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細^{しきさい}なきなり。念
仏は、まことに浄^{じょう}土^どにうまるるたねにてやはんべるらん、また、地^じ獄^{ごく}
におつべき業^{ごう}にてやはんべるらん。総^{そう}じてもって存^{ぞん}知^じせざるなり。
たとい、法^{ほう}然^{ねん}聖^{しょう}入^{にん}にすかされまいらせて、念仏して地^じ獄^{ごく}におちたり
とも、さらに後^{こう}悔^{かい}すべからずそうろう。そのゆえは、自^じ余^よの行^{ぎょう}もは
げみて、仏^{ぶつ}になるべかりける身^みが、念仏をもうして、地^じ獄^{ごく}にもおち
てそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔^{こうかい}もそうらわ
め。いずれの行^{ぎょう}もおよびがたき身^みなれば、とても地^{いち}獄^{じよく}は一定^{いちじょう}すみか
ぞかし。弥^み陀^だの本願^{ほんがん}まことにおわしまさば、釈^{しやく}尊^{そん}の説教^{せつきょう}、虚^{きょ}言^{ごん}なる
べからず。仏^{ぶつ}説^{せつ}まことにおわしまさば、善^{ぜん}導^{どう}の御^{おん}釈^{しやく}、虚^{きょ}言^{ごん}したまう
べからず。善^{ぜん}導^{どう}の御^{おん}釈^{しやく}まことならば、法^{ほう}然^{ねん}のおおせそらごとならん
や。法^{ほう}然^{ねん}のおおせまことならば、親^{しん}鸞^{らん}がもうすむね、またもって、
むなしかるべからずそうろうか。詮^{せん}ずるところ、愚^ぐ身^{しん}の信心^{しんじん}におき
てはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんと
も、またすてんとも、面^{めん}々^{めん}の御^{おん}はからいなりと云々

(『歎異抄』第2章、『真宗聖典』626頁)

S 参考資料2 『教行信証』坂東本



『正信偈』の冒頭部分

(東本願寺蔵) 写真：カラー影印本

ゆかりの地をたずねて・・・

⑭ ^{やなぎどう}柳堂（妙源寺）



真宗高田派の寺院。三河での真宗最初の念仏道場であるという。山号は桑子山。親鸞聖人は帰洛の途中、この地に40日間滞在し、桑子の太子堂で17日間説法をしたと伝えられる。この太子堂は、かつて堂の前に柳の大樹があったことから、「柳堂」（上写真）と呼ばれ、聖徳太子の木像を安置する。また、寄棟造り、桧皮葺きの建築様式は、1314（正和3）年の修造ながら、当時の面影をよく伝えており、国の重要文化財に指定されている。

所在地/愛知県岡崎市大和町沓市場
交通案内/JR「西岡崎」駅から徒歩5分

【聖人伝の空欄】60、教行信証、和讃

⑮ ^{たちばな}橘之御旧跡（河田家）



親鸞聖人が二泊三日の逗留をした河田彦左衛門の屋敷跡と伝えられ、地元ではよく知られた御旧跡。聖人は帰洛の際、この木曾川沿いの^{おおうら}大浦の地にも立ち寄り教えを説いたと言われる。「橘之御旧跡」の名称は、聖人の滞在中に「九年母」というみかんの実を献じ、それを聖人が喜んで食されたことに由来し、いつの頃からか、みかんの古名である「橘」の文字が用いられるようになった。

所在地/岐阜県羽島市正木町上大浦
交通案内/羽島市コミュニティバス「光法寺」下車、徒歩すぐ

第9章 善鸞義絶



《法語》

煩惱具足の凡夫、災宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、
そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまこと
にておわします。
(『歎異抄』後序、『真宗聖典』640頁)

【聖人伝】

親鸞聖人が京都に帰られた後、関東には聖人の教えを受けた人々が、有力な門弟を中心に聞法道場を作り、念仏の教えを語り合い、確かめ合っていた。しかし、次第に聖人の教えを曲解した、いわゆる「.....」などの異義がはびこり、時の権力者による弾圧を受けるような状況が生まれてきた。また、日蓮の念仏非難などもあって、関東の門弟達に動揺が起こり、聖人はそのような人々に対して、手紙をもって惑いを正されるとともに、子息.....を関東に送り、事態を収めようとされたのである。

しかし、聖人の意に反して善鸞は、聖人の子という立場を強く押し出し、自分が父から夜一人だけ秘かに念仏の奥義を伝授されたなどと語ったため、門弟達の混乱はいよいよ深まっていった。やがて京都の聖人にも事の真相が伝わり、ついに1256（建長8）年、聖人は.....歳にして、涙をふるって善鸞に義絶（親子・師弟の縁を切ること）を申し渡したのである。聖人の最晩年に訪れた、悲痛な事件であった。

視点 悩み迷いながら

関東教団の動揺を鎮めようとした善鸞は、親鸞聖人と親子であるという“世間の義理”をたよりにした。聖人はその義理を自ら絶ち切ったのである。

ただ、義理は切れても、“血”を絶つことは出来ない。親鸞聖人は善鸞の父であり、善鸞はその息子だということを止めることは出来ないのである。義絶という世間の上での対処は、同時に“縁切りの親子”となる。聖人の苦悩はいかばかりであったろうか。そのような厳粛なる事実直面し、身を引き裂かれんばかりの“生身の親鸞”を思わずにはいられない。

しかしまた、そのような苦悩にこそ再出発の一步が踏み出されるのではないだろうか。今、私の身の上を考えるに、やめたい現実、引き受けたくない事実の連続である。それらを前に、自分勝手な考えで解決したものと思い込み、自己満足に立ち止まっている私がそこにいる。歩けばつまずく。つまずくの恐れ、いつの間にか歩くのを止めているのである。実は、そのつまずきこそが私をよみがえらせるのである。

思うに、80歳を過ぎてなお現実に悩み迷いながら、その苦悩を抱えて道を求める行者こそ、我が宗祖であったのである。

★ノート★

S 資料1 造悪無碍

煩惱具足の身なれば、こころにもまかせ、身にもすまじきことをもゆるし、口にもいうまじきことをもゆるし、こころにもおもうまじきことをもゆるして、いかにもこころのままにあるべしともうしおうてそうろうらんこそ、かえすがえす不便におぼえそうらえ。えいもさめぬさきに、なおさをすすめ、毒もきえやらぬものに、いよいよ毒をすすめんがごとし。くすりあり毒をこのめ、とそうろうらんことは、あるべくもそうらわずとぞおぼえそうろう。

(『御消息集(広本)』、『真宗聖典』561頁)

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

⑩坂東報恩寺



親鸞聖人がもっとも信頼した門弟の一人、「横曾根の性信」を開基とする寺。もと下総国横曾根（茨城県水海道市）にあったが、現在は東京に堂宇を構えている。性信は関東門弟の中心的存在で、鎌倉幕府による念仏弾圧の際には、門徒を代表して回避に奔走した。善鸞の義絶時には、善鸞宛の「義絶状」と同日付の「義絶通告状」が性信宛に出されている。また、『教行信証』の唯一の聖人直筆本である坂東本は当寺に伝わったもので、聖人没後に性信が他の門弟より譲り預かったとの奥書が記されている。

所在地/東京都台東区東上野

交通案内/東京メトロ「稲荷町」駅から
徒歩 4 分

⑪高田専修寺



親鸞聖人が下野国高田にあった如来堂（上写真）を念仏道場として開き、のち有力な門弟・真仏に譲ったといわれる寺。真仏は、聖人帰洛後、性信らとともに関東門弟の指導的立場にあったが、聖人に先立って亡くなった。その教えを受けた門徒は「高田門徒」と呼ばれ、現在の真宗高田派に伝灯されている。また、善鸞義絶状は当寺に伝わったものである。真宗高田派の本山としては、現在、三重県津市一身田町・専修寺に寺基を移し、当寺は「本寺」とされる。

所在地/栃木県芳賀郡二宮町大字高田

交通案内/真岡鐵道「寺内」駅からタク
シー（徒歩 90 分）

【聖人伝の空欄】造悪無碍、善鸞、84

第10章 入滅



《法語》

箭に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は箭を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり。

(『教行信証』化身土巻「安楽集」、『真宗聖典』401頁)

【聖人伝】

善鸞義絶という悲しい出来事の後も、親鸞聖人は精力的に多くの著作を著わされた。「.....」を含む『正像末和讃』を完成されたのも、最晩年のことである。聖人85歳の手紙には、「目もみえず候う。なにごともみなわすれて候う」と記されているが、身体が確実に衰えていく中で、文書による伝道への熱意は一向に衰えることがなかった。

1262(弘長2)年.....月.....日、親鸞聖人は90年の生涯を閉じられた。入滅の場所は、次弟の尋有の住寺、善法院と伝えられる。聖人の臨終には、肉親は子息の道性と末娘の覚信尼、門弟は顕智と専信の計4人が臨んだと言われる。聖人の亡骸は、翌29日に火葬され、30日には京都鳥辺野の北、大谷の地に埋葬された。葬儀は覚信尼が主催した。

入滅後10年を経て、東国の門弟達が覚信尼に協力し、遺骨を吉水の北辺に埋葬し直して廟所を建立した。現在に続く.....の始まりである。

視点はたらき続ける願い

親鸞聖人の「某親鸞閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたうべし」という言葉は、虚無主義と映るかもしれない。聖人得度の頃、賀茂川には大飢饉による餓死者があふれていた。人々が無惨にその生涯を終えた賀茂川を、聖人は自らの肉体の帰る場所とされたのではなかろうか。そこには死して後も、名もなき人々と共に歩み続けようとされる聖人の覚悟がある。聖人の曾孫の覚如上人は、「これすなわち、この肉身をかりんじて仏法の信心を本とすべきよしをあらわしますゆえなり」と押さえられた。親鸞聖人の本体は肉身にあるのではなく、その信心にあるという讃仰である。

親鸞聖人が法然上人を通して出あわれたのは、「阿弥陀仏の本願を信じ、ただ念仏する」道であった。聖人はその道を、インド・中国・日本を貫く先人の歩みに確認していかれる。そこで聖人が発見されたのは、人間としての生き方を仏法に教えられ、念仏の教えを喜ばれた無数の人々だった。親鸞聖人の廟所を起源とする本願寺の歴史は、聖人のように仏法を喜ぶことを願う無数の先達の歩みである。人は亡くなって終わりではない。亡くなってなお用き続ける願いの存在を確信した人々の歩みは、今、私たちに届いている。

聖人は『教行信証』全体を結ぶ所に、道綽禪師の『安楽集』の言葉を引用される。それは、今に生きる私たちに対する聖人からの呼びかけである。

★ノート★

S 資料1 自然法爾

自然^{じねん}というは、自^じはおのずからという。行者^{ぎょうじや}のはからいにあらず、しからしむということばなり。然^{ねん}というはしからしむということば、行者^{ぎょうじや}のはからいにあらず、如来^{にょらい}のちかいにてあるがゆえに。法爾^{ほうに}というは、この如来^{にょらい}のおんちかいなるがゆえに、しからしむるを法爾^{ほうに}という。法爾^{ほうに}はこのおんちかいなりけるゆえに、すべて行者^{ぎょうじや}のはからいのなきをもって、この法^{ほう}のとくのゆえにしからしむというなり。すべて、人^{ひと}のはじめてはからわざるなり。このゆえに、他方^{たうき}には義なきを義とすとしるべしとなり。自然^{じねん}というは、もとよりしからしむということばなり。弥陀^{みだぶつ}の御^{おん}ちかいの、もとより行者^{ぎょうじや}のはからいにあらずして、南無^{なむ}阿彌陀^{あみだぶつ}とたのませたまいて、おかえんとはからわせたまいたるによりて、行者^{ぎょうじや}のよからんともあしからんともおもわぬを、自然^{じねん}とはもうすぞとききて候う。ちかいのようは、無上^{むじょうぶつ}にならしめんとちかいたまえるなり。無上^{むじょうぶつ}ともうすはかたちもなくまします。かたちのましまさぬゆえに、自然^{じねん}とはもうすなり。かたちましますとしめすときには、無上^{むじょうぶつ}涅槃^{ねはん}とはもうさず。かたちもましまさぬようをしらせんとて、はじめて弥陀^{みだぶつ}とぞききならいて候う。みだ^{みだ}は、自然^{じねん}のようをしらせんりょうなり。

(『末燈鈔』第5通、『真宗聖典』602頁)

S 資料2 覚信尼公御影



(新潟県上越市・福因寺蔵)

* 元来の姿をあまり留めていないが、
覚信尼の御影としては最も古いもの
とされる。母恵信尼が晩年を過ごし
た地に伝わった。

★ノート★

ゆかりの地をたずねて・・・

⑱^{ぜんぽう}善法院跡地



親鸞聖人入滅の地、善法院の跡地付近は、いつしか「親鸞ヶ原」と呼ばれるようになった。当地に聖人を偲び、法泉寺（大谷派）が建立されたのは江戸時代のこと。1925（大正14）年、法泉寺は隣接する柳池小学校の校地拡張により、上京区下総町（現北区小山下総町）に移転する。その際、門前にあった「見真大師遷化之旧跡」の石碑を残し、今に伝える。

所在地/京都市中京区柳馬場通御池上ル
虎石町

交通案内/市バス「河原町御池」下車、
徒歩5分

⑲^{おおたにびやうどう}大谷廟堂跡（^{そうたい}崇泰院）



1272（文永9）年11月、覚信尼は、東山西の麓、大谷の地に納められていた親鸞聖人の墳墓を移し、遺弟たちの協力のもと廟堂を建て、聖人の御影を安置した。後にこの廟堂が寺院化し、大谷本願寺と称するようになる。ここ崇泰院は、現在は浄土宗知恩院に属するが、その大谷の廟堂があった地といわれており、門前には「大谷本願寺故地」の石碑が建つ。

所在地/京都市東山区林下町

交通案内/市バス「知恩院前」下車、
徒歩5分

【聖人伝の空欄】 恩徳讃、11、28、本願寺

真宗門徒として知っておきたいこと

* 用語編

A 「苦」

迷い。思うようにならないこと。自我の思いにとらわれ抜け出せない状態。仏教では根本的な苦を「生・老・病・死」の四苦とし、これに加え以下の四つの苦を合わせて八苦と呼ぶ。

- ・愛別離苦^{あいべつりく}… 愛するものと別れること。
- ・怨憎会苦^{おんぞうえく}… 怨み憎んでいるものと会うこと。
- ・求不得苦^{ぐふとくく}… 求めるものが得られないこと。
- ・五蘊盛苦^{ごうんじょうく}… 五蘊(心身や環境を形成する要素)に執着すること。

B 「煩惱」

人間にそなわっている苦しみの源。目覚め、気づきを邪魔するもの。煩惱の数は限りないが、仏教ではもっとも根本的な三種の煩惱を毒にたとえている(三毒の煩惱)。

- ・貪欲^{とんよく}…むさぼり、満足することなく渴愛^{かつあい}のために苦しむ。
- ・瞋恚^{しんい}…いかり、我を失い自己中心的な考えにとらわれる。
- ・愚癡^{ぐち}…無明^{むみょう}ともいい、仏教の教えを知らないこと。

C 「戒律」

〈戒〉と〈律〉の合成語で、仏教教団の修行規範を示す用語である。もともと〈戒〉は修行規則を守ろうとする自律的な心で、修行を推進する自発的な精神であり、〈律〉とは出家者が集団生活を営む中で遵守すべき集団規則のことであった。ただ、両者に共通するものが多いことから、後に同一視されるようになった。ちなみに、すべての戒の基本として五戒がある。

- ・不殺生^{ふせつしょう}…生きものを殺さない。
- ・不偷盜^{ふちゅうとう}…盗みをはたらかない。
- ・不邪淫^{ふじやいん}…よこしまな思いやみだらな行いにふけらない。
- ・不妄語^{ふもうご}…有るものを無いといわない。無いものを有るといわない。
- ・不飲酒^{ふおんじゅ}…人間を酔わせるものを遠ざける。

D 「戒名・法名」

戒名と法名はよく混同されるが、法名と戒名とは意味が異なる。戒名とは、定められた戒律を厳守していくという名のりで、戒律を授かる(受戒)というところからきている。浄土真宗では受戒ということが無いので戒名とは言わず、南無阿弥陀仏の教え(法)に帰依した人という意味で法名という。

E 「得度式・帰敬式」

「得度式」とは僧侶として、また「帰敬式」とは門徒として、仏弟子の歩みに立つために受ける儀式。いずれも三宝^{さんぼう}(仏・法・僧)に帰依し仏弟子となり、法名(釋〇〇・釋尼

〇〇) をいただく。南無阿弥陀仏の教えに導かれて人生を生きていく出発の儀式である。

- ・ 仏…ブツダ、目覚めた人。
- ・ 法…ダルマ、真実の教え。
- ・ 僧…サンガ（僧伽）、教えによって結ばれた集い。

F「^{しょうどう}聖道門・浄土門」

浄土宗の開祖である法然上人は、仏教を「聖道門」と「浄土門」に分け、末法の世において能力や性質の劣る衆生^{しゅじょう}が実践できるのは、「浄土門」の説く易行しかないと主張した。

- ・ 聖道門…この世で自己の修行の力量で、さとりを開こうとする道。
(自力門・難行道^{じりき なんぎょう})
- ・ 浄土門…阿弥陀仏の本願力^{ほんがんりき}によって、浄土に生まれてさとりを開く道。
(他力門・易行道^{たりき いぎょう})

G「本願他力」

自我の思いを超えた阿弥陀仏の願いが、我が身にはたらいっているということ。何事も人任せの姿勢を「他力本願」ということがあるが、間違った解釈である。

- ・ 他力…阿弥陀仏の本願のはたらき。
- ・ 本願…すべての生きとし生けるものを救い取ろうという仏の願い。

H「名号」

阿弥陀仏の本願のはたらきが、具体的な名（南無阿弥陀仏）としてあらわれたもの。

I「悪人」

自分の力では仏になれないと自覚している人のこと。煩惱に苛まれているという思いのある人。

J「^{しちこうそう}七高僧」

親鸞聖人が浄土教の祖師として敬われた、インド・中国・日本の7人の高僧。聖人は『正信偈』や『高僧和讃』でこの七高僧を讃え^{たた}、浄土の教えが自らに届いたことを述べられている。

インド

- ・ 龍樹菩薩（150－250 頃）…易行道こそ求め願われることを説く。
- ・ 天親菩薩（4－5 世紀頃）…無碍光如来^{むげこう}（阿弥陀仏）に帰依すると表明する。

中国

- ・ 曇鸞大師（476－542）…他力（阿弥陀仏の本願力）を信ずることを説く。
- ・ 道綽禪師（562－645）…ただ他力の浄土門だけが救われる道であると説く。
- ・ 善導大師（613－681）…称名念仏でただちに往生出来ることを説く。

日本

- ・ 源信僧都（942－1017）…他力の信心による専修念仏と自力の念仏を判別する。
- ・ 源空（法然）上人（1133－1212）…阿弥陀仏の選ばれた行は称名念仏であると説く。

* 聖教編

K 『浄土三部経』

阿弥陀仏とその浄土に関する代表的な三種の經典。この三経をさして法然上人が、「^{かるがゆえ}故に浄土の三部経と名づくるなり。弥陀の三部は、これ浄土の^{しょうえ}正依の経なり」（『選択集』）と述べたことに由来する。ひろく浄土系諸宗正依の經典であり、とくに『仏説無量寿経』を〈大経〉、『^{ぶつせつかんむりょうじゅ}仏説観無量寿経』を〈観経〉、『^{ぶつせつあみだ}仏説阿弥陀経』を〈小経〉とも略称する。

- ・ 仏説無量寿経…阿弥陀仏の四十八の本願とその成就が説かれる。
- ・ 仏説観無量寿経…王舎城の^{ほんが}悲劇と凡夫の救いが説かれる。
- ・ 仏説阿弥陀経…極楽浄土の有様と阿弥陀仏の徳が説かれる。

L 『教行信証』

親鸞聖人の主著である『教行信証』は、正式には『^{けんじょうどしんじつきようぎようしょうもんるい}顕浄土真実教行証文類』という漢文体の書物である。教巻・行巻・信巻・証巻・^{しんぶつどのまき}真仏土巻・^{けしんどのまき}化身土巻の全6巻よりなり、私たちになじみ深い『正信偈』は行巻の末尾にある。經典や高僧の論釈の文を数多く引用しながら、本願念仏こそが真実の道であることを明らかにした、浄土真宗の根本聖典である。唯一の親鸞聖人直筆本は、東京の坂東報恩寺に伝えられたことから「坂東本」と称し、現在は東本願寺に所蔵される。

M 『三帖和讃』

和讃とは、仮名交じり文で作られた讃歌のことで、親鸞聖人は七五調による四行を基本形にして著述された。特に、『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』の三部は『三帖和讃』と称され、76歳の時『浄土和讃』と『高僧和讃』を書き上げ、その10年後に『正像末和讃』を書き上げられた。この三部の和讃を読み込むと、聖人の信心がより深まっていく過程がわかる。

- ・ 浄土和讃…阿弥陀仏と、阿弥陀仏の住む浄土を讃える。
- ・ 高僧和讃…親鸞聖人が尊敬する7人の高僧を讃える。
- ・ 正像末和讃…末法の世を嘆き、我が身を省みつつ、我が身の救いを喜ぶ。

N 『歎異抄』

『教行信証』が親鸞聖人の主著であるのに対して、『歎異抄』はその言行録である。聖人滅後、直弟子の唯円が、ゆがんだ教えを説くものが現れてきたことを歎き、聞き受けた教えをまとめたものとされている。親鸞聖人の生身の言葉に迫ってくるものがあり、他力信仰の極致が述べられているが、聖人直筆の書物でないことには注意したい。

O 『唯信鈔文意』

親鸞聖人が、同じ法然上人門下の先輩にあたる聖覚法印の著された『唯信鈔』について、その題号および引用された^{きようしやくもん}経釈文に、註釈を施されたものである。聖人は『唯信鈔』を尊重され、門弟にこれを熟読することを勧められたが、この『唯信鈔』の要文を解釈し、領解しやすいように説き示されたことで、浄土真宗の教義がより明らかにされたのである。

親鸞聖人足跡図

Map showing the pilgrimage route of Shinnyō (親鸞聖人) in the Kantō region. The route starts in the capital (京都) and proceeds through various locations, including:

- 比叡山 (Hiei-san)
- 興福寺 (Kōfuku-ji)
- 磯長・聖徳太子廟 (Isonaga・Prince Shōtoku's Shrine)
- 法隆寺 (Hōryū-ji)
- 運善寺 (Unzen-ji)
- 柳堂 (Yanagidō)
- 小野浦 (Ono-ura)
- 居多ヶ浜 (Irida-gahama)
- 本願寺派 国府別院 (Honan-ji-ha Kofu Betsuin)
- 善光寺 (Shinkō-ji)
- 五智国分寺 (Gochi-kufun-ji)
- 佐貫 (Sagami)
- 高田専修寺 (Takada Senjū-ji)
- 板敷山 (Itanaka-san)
- 横曽根 (Yokozoné)
- 坂東報恩寺 (Sankō Hōon-ji)
- 鎌倉 (Kamakura)
- 箱根 (Hakone)
- 稲田草庵 (Inada Sōan)
- 鹿島神宮 (Kashima Jingu)

親鸞聖人略年譜【便宜上尊称は省略する】

西暦	年次	年齢	親鸞聖人関係	一般事項
1173	承安 3	1	この年、誕生	
1175	安元 1	3		法然、専修念仏を唱える
1180	治承 4	8		8 月、源頼朝ら挙兵 12 月、東大寺・興福寺焼失
1181	養和 1	9	春、出家得度し、やがて比叡山に入る	閏 2 月、平清盛没
1182	寿永 1	10	この年、妻恵信尼誕生	春、京都餓死者多し
1183	寿永 2	11		7 月、平氏都落ちする
1185	文治 1	13		3 月、平氏壇ノ浦で滅ぶ 11 月、守護・地頭の設置
1191	建久 2	19	この年、磯長の聖徳太子廟参籠か？	7 月、栄西、禅宗を伝える
1192	建久 3	20		7 月、源頼朝、将軍となる
1198	建久 9	26	〔この年、法然『選択集』を著す〕	
1200	正治 2	28		1 月、道元誕生
1201	建仁 1	29	この年、六角堂参籠、やがて法然の門下に入り、専修念仏に帰す この頃、恵信尼と結婚か？	
1204	元久 1	32	11 月、『七箇条制誡』に綽空の名で署名	10 月、延暦寺衆徒、専修念仏禁止を訴える
1205	元久 2	33	4 月、法然より『選択集』の書写と法然の肖像を描くことを許される 閏 7 月、綽空の名を改める	10 月、興福寺衆徒、専修念仏禁止を訴える (興福寺奏状)
1207	承元 1	35	2 月、専修念仏禁止、越後に流される (承元の法難)	2 月、法然、土佐に流罪 西意・性願・住蓮・安楽、死罪 12 月、法然、流罪を許され摂津に留まる。
1211	建暦 1	39	3 月、子息明信誕生 11 月、流罪を許される	11 月、法然、入京許される
1212	建暦 2	40		1 月、法然、京都東山で没 11 月、明恵『摧邪輪』を著し、法然を非難
1214	建保 2	42	この年、関東・常陸へ、途中、上野佐貫で三部経千部読誦を発願、中止	
1221	承久 3	49		5 月、承久の変おこる 7 月、後鳥羽上皇隠岐に流罪 〔8 月、聖覚『唯信鈔』を著す〕
1224	元仁 1	52	この頃、『教行信証』草稿成立か？ この年、末娘覚信尼誕生	
1227	嘉禄 3	55		6 月、比叡山衆徒、法然の墓をこわす 7 月、隆寛ら流罪、専修念仏禁止（嘉禄の法難） 10 月、比叡山衆徒『選択集』の版木を焼く

西暦	年次	年齢	親鸞聖人関係	一般事項
1230	寛喜2	58	5月、『唯信鈔』を書写	7月、幕府、専修念仏禁止
1231	寛喜3	59	4月、病み、無量寿経読誦の行、内省する	
1235	嘉禎1	63	2月、幕府一切経校合に参加か？ この年、孫如信誕生 この頃、京都へ帰る	
1239	延応1	67		
1242	仁治3	70	9月、定禅、親鸞の影像を描く	
1247	寛元5	75	2月、尊蓮、『教行信証』を書写	
1248	宝治2	76	1月、『浄土和讃』『高僧和讃』を著す	
1250	建長2	78	10月、『唯信鈔文意』を著す	
1252	建長4	80	3月、『浄土文類聚鈔』を著す 書状により関東の「造悪無碍」を制止 この頃、関東の門弟、幕府に訴えられる	
1253	建長5	81		日蓮、法華宗を開く
1254	建長6	82	この頃までに、子息善鸞、関東へ下向か？	
1255	建長7	83	6月、『尊号真像銘文』(略本)を著す 8月、『愚禿鈔』を著す 11月、『皇太子聖徳奉讃』を著す 12月、火災にあう この年、専信、『教行信証』を書写し、朝円、 親鸞の影像を描く(安城御影)	
1256	康元1	84	3月、『入出二門偈』を著す 5月、善鸞を義絶する 10月、真仏・顕智・専信、三河薬師寺で念仏 を勧める 10月、十字・八字・六字名号を書く 10月から翌年1月にかけて、『西方指南抄』 を編纂・校合	
1257	正嘉1	85	2月、「弥陀の本願信ずべし」の夢告を感得 2月、『一念多念文意』を著す 2月、『大日本国栗散王聖徳太子奉讃』を著 す 閏3月、執筆中の『正像末和讃』に、「弥陀 の本願信ずべし」の夢告を記す この頃、視力が低下する	
1258	正嘉2	86	3月、真仏没 6月、『尊号真像銘文』(広本)を著す 9月、『正像末和讃』を再治する 12月、顕智に「自然法爾」について語る	
1259	正元1	87	9月、『選択集』(延書)を書写	
1260	文応1	88	12月、『弥陀如来名号徳』を著す	
1262	弘長2	90	11月、善法院にて病み、28日入滅、29日東山 に葬送	
				7月、日蓮『立正安国論』 を著す

参考文献

* 聖典・史料集・辞典

『真宗聖典』（東本願寺出版部）
『真宗史料集成 第1巻 親鸞と初期教団』（同朋舎）
『真宗史料集成 第7巻 伝記・系図』（同朋舎）
『日本古典文学大系30 方丈記・徒然草』（岩波書店）
『日本古典文学大系82 親鸞集・日蓮集』（岩波書店）
『日本思想大系10 法然・一遍』（岩波書店）
『日本思想大系11 親鸞』（岩波書店）
『日本思想大系15 鎌倉旧仏教』（岩波書店）
『総合仏教大辞典』（法蔵館）
『岩波仏教辞典 第2版』（岩波書店）
『日本仏教史辞典』（吉川弘文館）
『真宗新辞典』（法蔵館）
『浄土真宗辞典』（本願寺出版社）

* 単行本

真宗大谷派学校連合会（編）『親鸞の道』（真宗大谷派学校連合会）
真宗大谷派学校連合会（編）『親鸞—生涯と教え』（東本願寺出版部）
真宗大谷派教科書編纂委員会（編）『浄土の真宗—真宗概要』（東本願寺出版部）
真宗教学研究所（編）『宗祖親鸞聖人』（東本願寺出版部）
真宗教学研究所（編）『親鸞読本』（東本願寺出版部）
寺川俊昭（著）『親鸞讃歌』（東本願寺出版部）
宮城顕（著）『宗祖聖人親鸞—生涯とその教え（上）（下）』（東本願寺出版部）
アエラ編集部（編）『親鸞がわかる』（朝日新聞社）
赤松俊秀（著）『親鸞』（吉川弘文館）
阿満利磨（著）『親鸞』（筑摩書房）
伊藤益（著）『親鸞—悪の思想』（集英社）
今井雅晴（著）『親鸞の家族と門弟』（法蔵館）
岡野敏之（編）『親鸞と真宗』（読売新聞社）
笠原一男（著）『親鸞—煩惱具足のほとけ』（日本放送出版協会）
加藤智見（著）『あらすじで読む 親鸞の教え』（青春出版社）
佐藤正英（著）『親鸞入門』（筑摩書房）
平雅行（著）『親鸞とその時代』（法蔵館）
武内義範（著）『親鸞と現代』（中央公論新社）
橘弘道（編）『親鸞と蓮如』（朝日新聞社）
千葉乗隆（著）『親鸞聖人ものがたり』（本願寺出版社）
名畑崇（著）『シリーズ親鸞 第1巻 歴史のなかの親鸞』（筑摩書房）
西原祐治（著）『浄土真宗の常識』（朱鷺書房）
早島鏡正（著）『親鸞入門』（講談社）
平松令三（著）『親鸞』（吉川弘文館）
古田武彦（著）『親鸞』（清水書院）
細川行信（監）『古寺巡礼ガイド 親鸞（付・蓮如の旅）』（法蔵館）
松尾剛次（著）『親鸞再考—僧にあらず、俗にあらず』（日本放送出版協会）
山折哲雄（著）『親鸞をよむ』（岩波書店）
湯原公浩（編）『別冊太陽 親鸞（親鸞聖人750回大遠忌記念）』（平凡社）

あとがき

従来、同朋の会などで使われるテキストと言え、宗祖の伝記や法語の文章が綴られた教科書的なものであった。それはそれで優れたものばかりであったが、ともすると、講師の講義を一方的に聴聞するだけの形式になりがちであったように思う。つまり、受け身の学び方になってしまう傾向があったのである。もっとも、座談会を持つことで、そのあたりの問題はしっかりと克服されてきたのであるが、「寄合・談合」を基本としてきた真宗門徒の歩みからすれば、講義においてもっと語り合える“時”と“場”が求められてもよいのではないか、との思いも持つところであった。

本ノートはそのような模索の中で、書き込み式という新たな試案を提供することを目的に作成が開始された。ただ、掲げる目標が高いばかりに作業は困難を極め、2008年の11月、一年余をかけてようやく形にすることが出来たが、必ずしも満足した出来ばえとは言えず、皆様から実に様々なご批判をいただくこととなった。今ここで、それを逐一並べ挙げることは避けるが、最も声が多かったのは、「ボリュームが多すぎて消化しきれない」というものであった。そこでこの度、その声に応えるべく改訂に踏み切り、参考資料等を再検討して内容をシンプルにまとめ直してみた訳である。

とは言っても、これが充分なものと言えるかどうか、まだまだ心もとない。とても自信を持って世に問える代物とは言えないであろう。しかし、理想的な同朋会テキストへとたどり着くためには、やはり皆様からのご批判を仰がなければならないのも確かである。あえて冊子にせず、Pdfファイルというデータでの提供としたのもその意味からで、問題点があればその都度修正していきたいと考えている。各方面からの忌憚のないご意見・ご感想を切に望むものである。

なお、データの配布は「お東ネット」Web ページからのダウンロードを基本とするが、当センターにおいて直接お渡しすることも可能なので、ご希望の方は遠慮なくお申し出いただきたい。

2015年 1月30日

真宗大谷派 名古屋教区教化センター

主幹 荒山 淳

2008年11月28日 発行

2015年 1月30日 改訂

真宗大谷派 名古屋教区教化センター

〒460-0016 名古屋市中区橘二丁目 8-55

TEL (052) 323-3686

FAX (052) 332-0900

「お東ネット」 <http://www.ohigashi.net/>

恩徳讃

(親鸞聖人和讃)

如来大悲の恩徳は
にょらいだいひ おんどく

身を粉にしても報ずべし
み こ ほう

師主知識の恩徳も
し しゅ ち し き おんどく

ほねをくだきても謝すべし
しゃ

恩徳讃Ⅱ

沢 康雄 作曲

♩ = 63

にょ ら い だ い ひ の お ん ど く は

mf み を こ に し て も ほ う ず べ し *mp*

p し し ゅ ち し き の お ん ど く も

f ほ ね を く だ き て も し ゃ ー す べ し *mp*

所属 寺		法 名	
氏 名			